越境人

2010 SUMMER vol.2

コリア国際学園 広報誌

特集座談

保護者が語る

教育に賭ける思い

— それぞれの学校経験を通じて

■ 越境人を考える Part 2

■ 高等部 2年生に聞きました カナダ英語短期研修を終えて

■ KIS生徒たち、海外に飛び出す！

越境人 Contents 2010 SUMMER Vol.2

デザイン:尹 浩子

4 特集・座談

保護者が語る教育に賭ける思い
—それぞれの学校経験を通じて

太田 かおるさん（コリア国際学園中等部保護者）
都 裕史さん（白頭学院建国幼・小・中・高等学校保護者 OB）
鄭 龍寿さん（兵庫県立芦屋国際中等教育学校保護者）
白 星保さん（東大阪朝鮮中級学校保護者）
慎 健富さん（大阪市立中道小学校保護者）

10 『越境人』を考える Part 2

弘本由香里さん･･･極北の町に生き合う“隣人”
藤井誠二さん･･･「境界線」を生きている人
山口洋典さん･･･「わたし」と「あなた」から「わたしたち」の関係に

13 NEWS REPORT

英語GTEC試験結果・韓国語能力試験結果
教養・Liberal Arts科 授業訪問記
カナダ英語短期研修
第３回 KIS入学式
KSSC主催 キムチ講習会
韓国国際協力団KOICAの広報官特別授業

20 Activity Report

KIS生徒たち、海外に飛び出す!

22 Interview

嚴敞俊（オム・チャンジュン）副校長

越境人 2010年夏 第２号
・発行日 2010年6月1日
・発 行 コリア国際学園
〒567-0057 大阪府茨木市豊川2丁目13番35号
TEL:072−643−4200 FAX:072−643−4401
E-mail:contact-school@kis-korea.org http://www.kis-korea.org/

※越境人は年２回の発行です。 ※本誌記事を無断で転載等する事を禁じます。

“ささえています 街づくり”ナニワグループ

ナニワ生コン株式会社

所 在 地 ： 〒567-0057 茨木市豊川3丁目7番10号 TEL 072-643-0963 FAX 072-643-3019

取締役社長 ：姜 彰鎬
代表取締役副社長：姜 昌則

株式会社 大阪誠建
（セメント・生コンクリート販売）
所在地：〒567-0057 茨木市豊川5丁目1番10号
TEL 072-643-9311 FAX 072-643-3119

浪速建資産業株式会社
（一般貨物自動車運送事業）
所在地（本社）：〒533-0022
大阪市東淀川区菅原4丁目6番5号 TEL 06-6320-0666

建学の精神

境界をまたぐ「越境人」に。

21世紀の国際社会は、グローバル化と情報化が加速する一方で、政治・経済・社会・文化のあらゆる面において、解決すべき人類共通の課題にも直面しています。とりわけ東アジアは、その集約的な地域のひとつとしてダイナミックな変化が予見される歴史的な転換期にあります。

こうした時代状況を未来に向けて切り拓いていくためには、なにより個性と多様性の尊重を基礎とした創造力の溢れる人間が求められています。言い換えれば、柔軟な発想と幅広いコミュニケーション能力を兼ね備え、問題解決能力に優れた人間の育成にほかなりません。

コリア国際学園（KIS）は、在日コリアンをはじめとする多様な文化的背景を持つ生徒たちが、自らのアイデンティティについて自由に考え学ぶことができ、かつ確かな学力と豊かな個性を持った創造的人間として複数の国家・境界をまたぎ活躍できる、いわば「越境人」の育成を目指します。

コリア国際学園（KIS）は、すべての教育活動を通じて相互の信頼と協同を深め、地域社会に根ざし、コリアにつながり、世界に開かれた国際学校として、世界と東アジアの持続可能な発展に貢献します。

教育理念

多文化共生

民族的アイデンティティと自尊感情を育むとともに、多文化共生社会の実現に向けた知識、技能、態度を身につけた人間を育成する。

人権と平和

人間の尊厳と民主主義を尊重し、世界平和を希求する普遍的価値を創造するとともに、地球的視野を持ち、持続可能な社会の構築に貢献できる人間を育成する。

自由と創造

真の自由を理解し、豊かな個性と多様性を基礎とした創造力の溢れる人間を育成する。

◆ 校章・シンボルマーク ◆

目であり
宇宙であり
太陽であり地球であり
そして みつめていて、考えていて
そして いつも ゆれている

◆ デザイン・文 ◆

黒田 征太郎 Seitaro Kuroda
（イラストレーター）

くろだ・せいたろう ● 1939 年大阪府生まれ。'92 年にNew York へ移住。イラストレーターとしてポスターや挿し絵で数々の賞を受賞するとともに、壁画制作、ライブペインティングなど幅広いアーティスト活動を展開。
コリア国際学園の発起人のひとり。

◆ コメント ◆

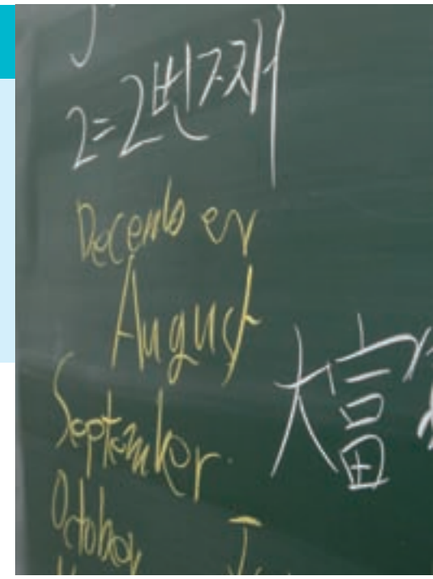
色は 中心が 赤（火）（光）
その外が 黄（アジア）
その外が 草色（地）
その外が 青（天であり水）
としました

保護者が語る 教育に賭ける思い

それぞれの学校経験を通じて

日本社会にもグローバル化と成熟社会に向けた波が押し寄せる一方、東アジアも大きく変貌をとげようとしています。時代や社会の転換期を迎えているなかで、コリアにつながる保護者たちの学校や教育に対する思いや、保護者や学校同士の今後のあり方などについて熱い‘本音’を語っていただきました。

（座談日：2010年3月27日）



慎　慎健富と言います。息子は、地元の公立学校である大阪市立中道小学校の5年生です。この学校には民族学級もあります。下の娘は幼稚園で、この4月から建国小学校に通います。

都　都裕史と言います。子どもが3人います。長男と次男は建国の小中学校を卒業しました。その後、日本の学校に進学しました。長女は、今年の3月に建国高校を卒業して、今は韓国に留学中です。自分自身は小学校から大学まで日本の学校を出ました。一番上の子どもである長男を建国に入れるかどうかについては、昨日のようによく覚えています。次の世代の保護者の考え方や意見について、関心があります。

太田　はじめまして。この4月からコリア国際学園中等部2年生と3年生になる娘が2人おります。子どもたちは韓国で生まれ、夫は韓国人で私は日本人です。10年ほど韓国で生活をしていましたが、小学校に入る前に日本に移り、子どもたちは地域の日本の学校に通いました。中学校に上がる時が、ちょうどKISの発足にあたり入学しました。子どもたちとともに将来のことを考えながら前向きに頑張りたいと思っています。

鄭　鄭龍寿です。子どもは4月から息子が高校1年生で、下の娘は中学2年生になります。2人とも建国の幼稚園と小学校を卒業しています。息子は私立の中高一貫校に行き、娘は兵庫県立芦屋国際中等教育学校に通っています。言葉と文化を身に付けてほしいと思い、建国に通わせました。

学年が上がるにつれて通学時間の長さが気になり、自由になる時間が少なくなるので地元の学校を選びました。学校を選んだ理由は、積極的な理由というよりは消去法でした。芦屋国際の場合も、自宅から近くて、いろいろな国の人がいるから面白そうだ、というぐらいの動機でした。

白　白星保と言います。私自身は幼稚園から高校まで朝鮮学校に通い、その後日本の大学で学びました。子どもは中学2年生と小学5年生の娘2人で、私自身が通った母校に通っています。いま朝鮮学校も過渡期で、誇るべきこともたくさんある一方で、さまざまな課題も抱えています。朝鮮学校の現状に悩んでいる時期にKISが設立され、子どもの進路について迷ったのですが最終的には朝鮮学校を選択しました。

都　長男が保育所を卒業するときにセレモニーがありましたが、その時点で彼だけが入学する小学校がまだ決まっていませんでした。子どもの学校選択については、相当悩みました。結局、私も消去法で決めました。日本の学校に入れるかどうかについては迷いましたし、自分なりにすごく調査もしました。東大阪市教育委員会から、「本名を名乗る」指導をする旨が記載された就学案内の通知がきていました。この通知の趣旨についてもう少し聞きたいと思い、直接教育員会まで出向きました。教育委員会の担当者の説明は、内実が伴っていませんでした。ある程度予想はしていましたが、教育委員会の対応に呆れました。教育委員会が最終的に言ったことは、「学区にある小学校に直接問い合わせてほしい」というものでした。次に学区の学校の説明を聞きましたが、最終的には体よく断わられた形になりました。

子どもの教育で大切にしたいところは、「プリ（根っ子）」でした。住んでいるのは日本ですが、生きているのは世界ですから、そうした視野を持った教育を受けさせてやりたいと思いました。

私は在日同胞の密集地である東大阪で育ちましたから、どんな問題があっても家に帰ってくれれば地域で癒される空間がありました。しかし、今はそうした空間が地域で崩壊しています。日本社会のなかで、子どもが民族的な自尊感情を持って生きていく癒しの空間が必要だと思います。それを地域や学校で保障できなければ、子どもたちは日本社会で戸惑いながら生きていくしかありません。

「プリ」を形成しながら生きていく在日朝鮮人像を育むためには民族学校あるいは優れた人権意識を備えた学校環境が必要です。私は「地域」を選択して、朝鮮学校への進学を希望していましたが、連れ合いは朝鮮学校の教育内容には疑問があるとして、次善の選択として最終的に建国を選びました。

太田　幼稚園の時は、韓国で生活をしていましたが、日本に来て日本の学校に通っていると、かつてのように韓国語を流暢に話しすることができなくなっていきました。「韓国語を忘れては

子どもが民族的な自尊感情を持って生きていく癒しの空間が必要だ。（都）

（出席者・左より）
太田 かおる（コリア国際学園中等部保護者）
都 裕史（白頭学院建国幼・小・中・高等学校保護者 OB）
鄭 龍寿（兵庫県立芦屋国際中等教育学校保護者）
白 星保（東大阪朝鮮中級学校保護者）
慎 健富（大阪市立中道小学校保護者）

KISでさまざまな教育を経験して、前向きに考えて一層努力していきたい。（太田）

ならない」という親の思いもあり、小学校の3年生の時に再び韓国に渡り、2年間韓国の小学校に通うことになりました。

競争の激しい韓国の小学校のなかでも、子どもたちはそれなりに努力をしました。その時に子どもの持つ対応力の「すごさ」を感じました。その後再び日本に戻ることになり、日本の中学校に入りましたが、日本社会にいながらも韓国の言葉や文化などを子どもたちにも意識していてほしいという願いが、特に夫は強かったように思います。

そうした中で、KISが開校する時期と重なり、何か縁を感じ、暮らしていた滋賀県から中学1年生の娘をKISの寄宿舎に入れました。その時は、大袈裟ではなく子どもが心配で生きた心地がしないほどでした。今は、KISでさまざまな教育を経験して、前向きに考えて一層努力していきたいと思っています。両親ともども、語学の習得に対する関心はとても高いです。小さいときから語学を学ぶと「早すぎる」と言われることもありますが、「早すぎる」ことは悪いことではない、と思っています。

鄭 芦屋国際中等部教育学校の理念には、「多文化共生」が掲げられています。入試は面接と小論文だけで行われます。子どもに受験勉強させるのはイヤでしたから、これでいいのではないかと思い勧めました。

1学年は80名です。入学する生徒は、外国人枠と帰国者枠と日本人枠の3つの枠に分けられます。公立のインターナショナルスクールですから費用も安くて、英語に力を入れています。母国語の授業もあります。

合格者の中から最終的には抽選で入学者が決まるので迷っていましたが、息子は私立の中高一貫校と公立の芦屋国際のパンフレットをと見比べて、お金をかけた私立のパンフレットの見栄えがよかったので心が揺れて（笑）、最終的には私立の一貫校である関西学院中等部・高等部を選択しました。「Mastery for Service（奉仕のための練達）」というスクールモットーも魅力的でした。

通わせてよかったのですが、民族教育はできませんよね。芦屋国際は運営母体が公立ですので姿勢自体は普通ですが、保護者の方がとてもユニークで活動も活発です。それぞれの民族教育の持続性も多少なりとも可能だと思い、娘を進学させようと思いました。

朝鮮学校も学校全体として変化に対応する努力をしている。（白）

白 子どもを朝鮮学校に入れるときは、自分の母校でもあり自然な感じでした。非常にいい学校ですが、朝鮮総連と共和国（朝鮮民主主義人民共和国）に偏っているところがありますので、学校としては、その点はよくないと。

政治的に中立的な立場でなければ、入学させたい保護者もできないですから。

朝鮮学校が好きで、また1世・2世が代を継いで守ってきたと思うからこそ、逆にそのように強く思うようになりました。ちょうどKISの設立と重なり、自分の娘が1期生にあたることになり、正直非常に迷いました。KISの教育カリキュラムや内容も、非常に良かったので妻は乗り気でした。

最終的に朝鮮学校を選択したのは、中級学校までは教育内容も変わり、学校全体としても変化に対応する努力をしているからです。現場の先生は非常に頑張っています。そうした変化を一緒に体験しなければならないと思ったのです。朝鮮学校が変わるために、自分も何らかの手を貸すことが必要だと思いました。

KISに行けば、朝鮮学校にいる時のストレスは解消されるかもしれませんが、自分の母校でもあり、変わろうとしている朝鮮学校に身をおいて、その改革に関わらなければと思いました。朝鮮学校の外から批判をすべきでないと思います。子どもは、生き生きしながら学校に通っています。今後、誰もが通えるよう、朝鮮学校の政治的な敷居を低くする努力が必要だと感じています。

慎 私自身は小学校から大学まで日本の学校に通いました。在日同胞がたくさん暮らす大阪市生野区で暮らしていましたので、小・中学校には民族学級がありました。韓国語が話せるようになるわけではありませんが、少なくとも自らがコリアンであることを意識して育ちました。大学時代には、同胞の学生組織で活動をしていましたのである程度「民族」にこだわりながら子育てもしてきました。

グローバル化の時代には、英語を身につけることが必須だ。（慎）

これからのグローバル化の時代には、英語を身につけることが必須だと思います。ですから、小学校に入る前には、英語を学ぶプリスクールに子どもを通わせていました。小学校に上がる時には、日本の学校か朝鮮学校に入れるかの選択でしたが、朝鮮学校はやはり思想的な問題があると思い、地域の公立学校に入れました。韓国語を学ぶのは大きくなってから韓国に留学させて身につければいいと考えました。

私は民族差別を受けた経験がありません。それは悔しく腹立たしいのですが、そこで自覚することもあります。私の子どもも小学校1年生の時に、朝鮮半島で緊迫した情勢になった際には、「朝鮮人帰れ！」と言われた時がありました。その時には、逆に学校全体として人権研修をする機会も持ちました。下の娘は、5歳のとき自分のことを日本人だと言い張っていました。どうしてかと聞くと自分は日本語しか話ができないからと。「これはまずい」と思い、

子どもには、肯定的なアイデンティティを育むことから始めてほしかった。（鄭）

とにかく「朝鮮」という言葉を忌み嫌う、これが私の実感です。

朝鮮学校は政治的な障壁が高いと長く言われてきました。私もそう思います。ただし、建国にも韓国という国家の政治的な問題があります。日本の学校には、日本の国家の問題があります。

近年、文部科学省からも強い国家色が打ち出されているにも関わらず、見えにくくなっています。国家に関わり朝鮮学校だけを問題視しますが、実は、建国であれ日本の学校であれ、国家色が教育に強く反映されています。

韓国語、英語など言語をスキルとして、子どもに覚えるように言ったことは、私は一度もありません。朝鮮人として朝鮮語で何を話すのかという「プリ」は、幼い時につけておかないと間に合いません。私はその一念が強い。教養やスキル、学力があればそれにこしたことはありません。しかし東京大学にいけば幸せになれるかといえば、そうではありません。私が民族学校に子どもを入れたのは、ウリマル（朝鮮語）を学ぶことや歴史の知識を学ぶことではなくて、民族的なアイデンティティを身につけてほしいからです。子どもたちは自分の朝鮮人としてのプライドを包み隠す必要はないし、そうした意識を育ててくれた建国小学校や先生を非常に高く評価しています。

鄭　僕の民族的なアイデンティティとは、抑圧されたマイノリティがそうであるように、ベースが「反日」です。嫌いという「反」ではなく、抑圧への抵抗という意味で「反日」です。でも「反日」からでる民族的アイデンティティは不幸だと思います。エネルギーかもしれないが、やはり不幸だと思います。世界中でマイノリティが持っているエネルギーは強さではあるが、幸せではない。マイノリティもマジョリティと同じ肯定的なアイデンティティを持つことが一番重要なことだと思います。

なぜ、子どもに民族教育を受けさせたいかというと、子どもには肯定的なアイデンティティを育むことから始めてほしかったからです。一方で、日本社会でマイノリティとして生きるときに、もう少し在日としてのマイノリティの立場を相対化する力がほしい。そういう意味で建国に入れたかったのは、ニューカマーの子どもが増えていた時ですよね。

自分の関心や理解は、語学力によって変わってしまいます。日本社会のマジョリティの意見の受け売りばっかりすると、それは「つらい」面があると感じます。建国に通うことで、韓国語でインターネットを見ることができるようになった点などは、その意味からも良かったと思っています。やはり「肯定」から始まってほしいなと思います。

慎　私自身は、それほど「民族」にこだわっているわけではありませんが、自分自身を素直に認めることは大切です。子どもにはコリアンであることを素直に肯定的にとらえてほしい。そういう意味では民族的かもしれません。人間的であることが根底にあり、そのうえでコリアンであること、そんなイメージです。

大学時代の同胞学生の組織に入ったのも、「民族」からではなくて、ちょうど1980年5月の光州民衆抗争に接して、人間的に許せないという思いから活動に入って行きましたから。

鄭さんがお話しされていたように、自分自身を肯定的に受け入れることが、やはり重要だと思います。自尊感情を持つこと、自分をリスペクトすることがある程度確立されないと。二つ目には、自立し自律するための教育です。これは学校教育だけでなくて家庭教育

自尊感情を持つこと、自立・自律すること、社会正義について判断できることが重要だ。（慎）

娘は建国小学校に入れることにしました。

都　建国は、私の高校時代には太極旗（韓国の国旗）はまだ掲揚されていませんでした。日本社会での北朝鮮への政治的パッシングは、ある種のマインドコントロールですよね。思想云々ではなくて、いま日本社会は、反射的にりようがありません。これから50年、100年経っていくと在日朝鮮人の定義の仕方や依拠するものも変わっていかざるをえません。

特に朝鮮学校はそのあたりの課題があり、非常に内向きの社会です。朝鮮学校では、朝鮮人であることが普通の空間ですから、子どもたちは日本で生きていくすべを学校で学ぶことはありません。日本社会で生きていくことを前提に、どう教育内容を発展させていくのかが課題ですね。

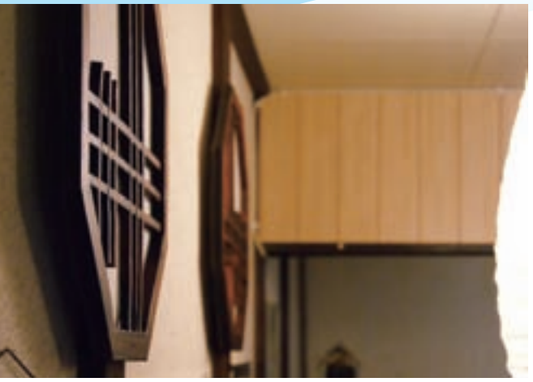
鄭　芦屋国際の場合、毎年30カ国ぐらいの子どもたちが通っています。例えばAI（Ashia International）という授業がありますが、4カ国の学習をします。帰国子女や日本人の生徒は、中国、コリア、フィリピン、ロシアの4カ国の文化や言葉を勉強したい希望先の授業に入ります。1年生だけ、自分の出身国の授業に参加します。そして6年間を通じて、その国の歴史や文化を学んでいきます。文化祭やいろいろな発表会に、AIで学んだことについて発表します。多文化の相互理解を深める試みとして、また自分を相対化するものとして面白い取り組みだと思います。

インターナショナルスクールですから英語をはじめ最低3言語は学ばなければならないようになっています。在日の娘が、中国人の生徒に韓国語を教や社会教育の領域でもそうでしょう。3つ目に、民主主義教育です。他者を認め、社会的な正義や公正さについてきちんと考え、判断ができる力を育む教育が必要だと考えています。

日本社会では、こうした力を育むことが弱いように思います。社会的に抑圧された人しか声を上げません。一般の市民が、社会的な問題に関心を持って声を上げることが少ないように思います。それは民主主義や社会正義に関する基本姿勢ができていないことに起因しているのではないでしょうか。

白　僕ら在日3世は、1世を知っている2世が親でもあるので、かろうじて国とのつながりについての意識はあります。4世の娘の世代になると、明らかに国や民族との関係は強くな

朝鮮学校は日本社会で生きていくことを前提に、どのように教育内容を発展させていくのかが課題だ。（白）



学校がすべてを教えるという考えを持つべきではない。（都）

え、反対に中国人の生徒から中国語を学んだりします。そうした関係性は面白い。普遍的にものを考えて、例えばマイノリティとは何か、相互理解とは何か、などについて体験することは大切だと思います。また、協力する保護者のパワーもすごい。

太田　KISも英語、コリア語、日本語の3ヶ国語の育成を掲げて、英語にもとても力を入れています。子どもたちが小さいころから、いろいろな国の人たちと生活のなかで共生していく場があればいいなと思っています。

都　私たちは学校教育に期待しすぎだと思います。学校がすべてを教えるという考えを持つべきではありません。在日同胞社会の限られたパイを食い合うという発想なら、KISも建国も朝鮮学校も未来はありません。学校教育に重きを置きすぎている日本社会の悪癖が、いじめや不登校などを生み出してもおり、その総括もできていません。今後日本社会は、もっと厳しい状況に落ちていくように思います。そうした日本の社会や教育に比較対象の軸を持っている限り、建国、朝鮮学校、KISであれ、何の新しさや将来性も感じません。

日本社会において、朝鮮籍の同胞は、無国籍状態に置かれています。そうした状況が変わらない中で、日本社会が共生社会であるとはとんでもない話です。韓国系の民族学校や日本の学校にとって、最も交流すべき対象は朝鮮学校に通っている子どもたちであり、そことのネットワークを構築すべきだと思います。交流すれば、顔や名前を覚えます。そうすれば偏見がなくなり、喧嘩しなくなるでしょう。

慎　一般的に教育という場合、自尊感情を育むことと自立することを小中高の過程でつくり、それを基礎にして高等教育機関における教育があると思います。それまでは地域、学校、保護者の協力のもとで子どもたちを育てていくものであり、学校教育だけに求めるものではありません。

KISの建学の精神である「越境人」の育成は、説明がないとイメージしにくいと思います。ただ、やろうとしていることの中身や考え方の個々を見ると、大切なことをされている印象はあります。限られた中高6年間のなかでやれることを踏まえることが重要でしょう。実際、学校教育は子どもが成長した結果を問われますから。「これだけの教育をしてますよ」「こんなすごい内容をしてますよ」ではなくて、実際に子どもが生きていく力を身につけたのかを判断基準にしなければダメでしょうし、本当に重要なのは卒業を迎えた子どもたちが生き生きしているのか、という点です。

都裕史氏の指摘にもありましたが、建国や朝鮮学校の交流が少なかったのは残念ですし、学校教育はお互い切磋琢磨し、よりよい教育を行っていくことが大切だと改めて思いました。

白　確かに学校教育に過度な期待を持つのは、ダメだと思います。学校、特に小中の場合、その背景にはコミュニティがあります。以前に比べれば、そうしたコミュニティは廃れてきています。その中で一番それが持てるのは学校ですね。学校の後ろには必ず地域があります。その意味を私は大切にしたいと思います。

同胞学校同士の交流はもちろんですが、その先に日本社会があり、「共生」することが大切です。日本社会を基盤にして生きていく私たちが日本社会とどう向き合うのか、また日本社会が私たちにどう向き合うのか、お互いに相手をどう尊重するのかという当たり前の観点を持たないといけないでしょう。日本社会との「共生」は必要な話です。学校もそうした意識を持たないといけません。

学校の後ろには必ず地域がある。その意味を大切にしたい。（白）

教育とは、「人生は面白い」ことを自覚できる機会と技術を提供する一つの場である。（鄭）

鄭　人間の生きる力を養う根本は、「人生って面白いなあ」と思うことではないでしょうか。教育とは、「人生は面白い」ことを自覚できる機会と技術を提供する一つの場であると思います。日本社会は、親が仕事に没頭するあまり、学校にすべてを委ねているところがあります。とくにマイノリティであるぶん、学校にすべてを委ねている日本の教育システムに同調してやっていくわけにはいきません。

「越境していく」力、生きていく力をどうつけていくことができるのか、自分の人生を肯定的に見ていけるのか、について保護者の立場から見ていくことが重要でしょう。

下の娘の進学先の選択肢としてKISも考えましたが、あきらめたのは通学時間が長くなるのと、「土曜日に学校があるところは行きたくない」という娘の言葉でした。さらに平日に7時間授業があったことです。自分の時間をもっと楽しむ時間が欲しいと。子ども一人ひとりが学校の中で充実感を持ち、「ああ楽しい」と思えることがどれほどできるのか、がどの学校でも一番大事ではないかと思います。

太田　アイデンティティの問題は、学校や社会の課題でもあるのでしょうが、最終的には家庭での教育やあり方が一番重要ではないでしょうか。子どもたちが将来夢に向かってどのように貴重な時間を過ごしていけるのか、ということだと思います。保護者の欲ではなくて、それぞれの学校で将来どのようなことをやっていきたいか、自分のためだけではなく、誰かのために生きることができる自分を見つけていくことができる学校生活を保護者も後押しできればと強く思います。

自分のためだけではなく、誰かのために生きることができる自分を見つけていくこと。（太田）

座談会を終えて――

当然と言えばそうだが、保護者の子どもへの愛情と教育・進路選択に対する思いは、とにかく"深く熱い"。座談会を終えて、あらためてそう実感した。子どもが自らのルーツをありのままに肯定的に受け止めてほしいという保護者の願いは、多少の温度差はあっても共通認識としてあった。

多様化と複雑化と変化のスピードが加速するグローバル化と成熟社会にあっては、これまでの画一化と硬直化と旧態依然たる教育の仕組みや価値観が大きく揺らぐのも、また自明なことだ。「学校教育に期待しすぎる」ことへの戒めや「自立し、自律するための教育」の重要性を強調する保護者の発言には、日々の厳しい生活実感を背にした保護者自身のリアルな考えを垣間見た気がした。

未来の教育には文字通り「正解」はない。意識された試行錯誤の連続だけだろう。それぞれの学校が切磋琢磨し、協力し合い、次代を担う子どもたちのよりよい教育をつくるためには、尽くされた論議が何より重要だ。その意味でも、今回の座談会は有意義な機会となったように思う。

（進行役　宋悟・KIS事務局長）